

子ども国際理解サマースクール

国際学部長(宇都宮大学 HANDS プロジェクト研究代表) 田巻松雄

1. 事業の目的・意義

2015年8月6日と7日の2日間、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターと HANDS プロジェクトの協働で「子ども国際理解サマースクール」が行われました。本事業は、HANDS としては6度目となる多文化共生教育実践です。

第1日目の目的は、国際的な活動をしている方を講師に迎え、子どもたちの目を世界に向けるきっかけづくりで、第2日目の目的は、宇大生の学生団体 HANDS Jr や宇大留学生などの企画・支援のもと、かれらと直接交流しながら、参加小学生たちの国際感覚を養うことです。

2. 事業内容

(1) 参加型講義

第1日目：8月6日10時～12時

テーマ「世界を知ろう & 世界から学ぼう 2015 ～アンデス編～」

(2) 国際交流

第2日目：8月7日10時～14時

テーマ「世界を感じよう 2015 ～宇大留学生たちとの交流～」

3. 事業の進捗状況

(1) 第1日目

テーマ「世界を知ろう & 世界から学ぼう 2015 ～アンデス編～」

講師 グローバル・グループ代表 山本和子さん、
フォルクローレ グループ ワイラより6名のみなさん(代表 坂井正夫さん)、ペルー出身のコハツ ホセさん(宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程2年)

・アイスブレイク：新聞紙ボール de ゴール (ホ

セさん)

・地理、ケチュア語、動物、食べ物、生活、民族楽器(ホセさん)

・民族楽器の説明とフォルクローレの演奏(山本さん、ワイラのみなさん)

・ケーナ等の試奏体験(山本さん、ワイラのみなさん)

まず、ホセさんから以下の様に学びました。

アイスブレイクとして、新聞紙でサッカーボールを作りました。南米では子どもから大人までサッカーを楽しみます。しかし、南米の貧しい家庭の子どもたちの中には、サッカーボールを買えない子どもがたくさんいます。そこで、新聞紙5枚程度を用意し、1枚を固く丸め、その上にまた一枚と丸めてボールを作り、それで遊ぶのだそうです。クーラーもヒーターもなく、ロバなどの家畜の世話の手伝いが毎日の日課と、日本の子どもたちとは全く異なる生活を送っている貧しいながらも創意工夫してサッカーをする世界の子どもたちの姿を想像し、参加した児童たちは、自分で作った新聞紙ボールを思い思いに蹴りました。その後、アンデスの地理、動物、食べ物、生活、ケチュア語を学習しました。アンデスの高い山々が雪に覆われている大自然の映像に、子どもたちは感動していました。アルパカとリャマの違い、ジャガイモやトマトなどがアンデス原産の野菜だということ、Allin p`uchay(おはよう)、Allin sukha(こんにちは)、Allin tuta(こんばんは)、Sulpayki(ありがとう)、Ima mauta(どういたしまして)等のケチュア語、初めて知ることばかりでした。



次に、本学の学生ボランティアたちによる「アンデスあるある寸劇」の舞台がありました。日本人旅行者役の学生、アンデスの民族衣装を着た現地人に扮した学生、リヤマ役の学生たちが、アンデス旅行をしている設定です。民族衣装を着た現地人と記念写真を撮影後にチップを要求されること、現地人に道を尋ねたら、目的地まで「近いよ、すぐだよ」といわれたが、三日もかかることがよくあるという距離感の違い、アルパカやリヤマに近づくとつばを吐かれる等、おもしろおかしく学ぶことができました。前期試験終了直後で練習する時間がなかったにもかかわらず、学生たちは皆、名俳優でした。

そして、山本さんや和イラのみなさんにアンデスの楽器や音楽について教えていただきました。『花祭り』と『コンドルは飛んでいく』の歌や演奏を聴きました。ギター、竹製のサンポーニャ、アルマジロで作られたチャランゴ、木の実でできたマメチャフ、山羊の爪でできたチャフチャス、木で作られたマトラカ、世界一固い木ワヤカンで作られたケーナ、太鼓の皮がリヤマ・ロバ・牛で作られるというボンボ等、楽器の紹介がありました。どれも初めて見る楽器、初めて聞く音色、それらの素晴らしいハーモニー、いつまでも聞いていたいと思ったことでしょう。ボリビア民謡『アンデスの祭り』は、6年生の音楽の時間で学習するそうです。その『アンデスの祭り』をワイラのみなさんの演奏に合わせて、途中で手拍子や足踏み

のリズム伴奏を入れながら、みんなで歌いました。

最後に、ワイラのみなさんの指導のもと、サンポーニャ、ケーナ、ボンボ等試奏したり、山本さんに教わりながら民族衣装を試着したりしました。

日本から非常に遠い南米にあるアンデス。その南米から宇都宮市にもたくさんの外国人児童生徒が今回参加してくれた児童たちと学んでいます。その今回参加してくれた児童たちに少しでもアンデスに興味を持ってもらえたらという気持ちで企画しました。山本さんやホセさんには、本事業の趣旨を深くご理解いただき、惜しめない準備をしていただきました。ワイラのみなさんには、お忙しいところ、子どもたちへ素敵な音楽をご披露いただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。



いろいろな小学校から参加した児童たちですから、ほとんどが初めて出会うお友だち。新聞紙ボール de ゴールのようにみんなで体を使って活動したり、アンデス地方の民族楽器を試奏したりするうちに、自然に仲良くなって、最後には、「じゃあね」「また明日ね」と解散していました。

(2) 第2日目

テーマ「世界を感じよう 2015 ～宇大留学生たちとの交流～」

本学には、世界の29の国・地域から257名の留学生が学んでいます(本学学務部留学生・国際交流課調べ、2015年5月1日現在)。今回は、9つの国や地域出身の11名の留学生に協力を依頼しました。9つの国や地域とは、コスタリカ、チェコ、マレーシア、台湾、韓国、ベトナム、イタリア、チリ、タイです。今回は、コスタリカ出身の留学

生ロニー ホセさんと日本人学生が中心になって、コスタリカ、チェコ、マレーシア、台湾、韓国の5つの国や地域を中心に学ぶ交流内容を何日も何日も考えました。加えて、特にこの日のために、HANDS Jr という外国人児童教育支援や国際理解活動に強い関心を持つ学生団体が熱心に企画・準備・運営しました。以下の5つの活動を中心に交流することができました。

① アイスブレイク「新聞紙を使って AMIGO！」

まず児童を5つのグループに分け、広げた新聞紙1枚に各グループ何人乗れるか、全員が乗れるかを競い合います。普通に起立しただけですと、3人くらいしか紙上に乗ることはできませんが、「抱っこしよう」「おんぶしてみよう」などと、コミュニケーションをはかりながら協力することを学びます。

② 交流ゲームA「スプーンレース」

手に持ったスプーンにピンポン球を乗せて10メートルの距離を往復する、グループ対抗レースです。ピンポンの「バトン」が渡ると、落とさないように慎重になりつつも、どのチームも1位を目指してゴールまでがんばりました。

③ 交流ゲームB「ピックザボール」



まず、児童たちは指示だしワークシートで、各言語での指示の言い方を学びます。先述の5つの国や地域の言語であるスペイン語・チェコ語・マレー語・中国語・韓国語で、「前」「後」「右」「左」「止

まれ」「前に進め！！」「後ろに下がれ！！」を学習しますが、普段耳慣れない言語に悪戦苦闘していました。その後、ゲームを始めます。目隠しをした各グループの代表留学生に各言語(チーム別)で指示を与え、スタート位置から10メートル先の円の中にあるボールを拾い、スタート位置にあるカゴにまでそのボールを入れますが、できるだけ多くボールを制限時間以内に入れます。4色あるボールの色で得点が変わりますが、留学生は目隠ししているので、各言語での指示の正確さが得点を大きく左右します。

④ 交流ゲームC「ドッジビーde AMIGO！」

大きなコートの中に2チームに分かれた児童と留学生が、コートの外に大学生が外野としてスタンバイし、ドッジビー対戦しました。投げられたドッジビーに当たった児童はコートの外へ移動し外野になります。最後まで内野に残れるよう熱戦を繰り広げました。

⑤ 国際理解ゲーム「4 Corners Quiz」

パワーポイントを使って、留学生の出身国ごとに4択クイズを出題しました。国旗についての出題やその国で有名な料理を選ぶクイズなど、留学生たちが用意した問題が出されました。児童が正解だと思う答えのコーナーに移動してもらい、正解を発表し、留学生による補足説明を行いました。例えば、「チェコ語からきた外来語はどれでしょうか？」の問いに、「A: ロボット、B: リュック、C: ズボン、D: イクラ」から答えを選び、Aだと思う人はAのコーナーに行きます。当たれば、のちにポイント換算するシールをもらえます。すぐにおかかってしまう問題もあれば、私たち大人もどれだろうと少し悩む問題もありました。

閉校式では、宇都宮大学国際学部長 田巻松雄が、「国際的なことにもっともっと目を向けましょう。大きくなって宇都宮大学国際学部に入ってきたみなさんと、また会えるといいな」とあいさつしました。解散後、留学生たちに駆け寄ってあい

さつしたり、握手をしたり、別れを名残惜しそうにしていた児童たちを見て、この交流の意義を達成できたのではないかと思います。

4. 事業の成果

参加小学生からは、本スクールに対して概ね高い評価が得られました。アンケート結果の内容等から、アンデスをテーマとする参加型授業と本学留学生との交流事業に参加したことで、参加小学生の国際的な関心や国際感覚が大いに増大したと判断されます。また、本学留学生と日本人学生は本スクールの企画・運営を担ったことで、実践的な国際理解教育を推進する力を向上させました。参加いただいた講師の方々からも非常に有意義なイベントだとの評価をいただきました。

5. 今後の展望

国際的な視野や感覚を養い、多文化共生教育実践は初等・中等教育で益々重要となっております。しかし、学校単独での教育実践はなかなか進んでいないのが実情です。従って、この様なスクールの重要性は極めて高いと言えます。例年、本スクールへの参加希望者は定員を大きく上回ってきました。そして、参加者からは概ね高い評価を得てきました。リピーターも何人か出ています。この大きな理由は、学校現場での国際理解教育がまだ少ないことに加え、本スクールでは、大学と行政が協力連携しながら何度も協議を重ねて用意周到に計画を立て実施してきたことにあります。参加小学生にとっては国際的な問題関心と国際感覚を養う貴重な場となっており、参加大学生にとって

は実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっております。国際学部と HANDS プロジェクトの人的資源等を活かした効果的な地域貢献・人材育成事業となっており、今後も継続的に実施していきたいです。

